

## 第2項 掘立柱建物

### (1) SB0038a

3区中央やや北側で検出した掘立柱建物である。1×2間の南北棟で平面形はやや歪んだ平行四辺形を呈す。梁間3.6m、桁行5.1m、面積18.4㎡を測る。主軸の方位は北から14度西に偏る。南端の柱穴2基が後期の堅穴建物SH3376aに切られる。柱穴の平面形状は不整な隅丸方形。柱痕は直径15～18cmで検出面における柱抜き取り穴は確認していない。南東隅のSP0020aとSP3987aの関係は当初fライン断面に示したように大形の柱穴としていたが、東側に柱痕を有するSP0020aを新たに検出し、位置関係を検討したところ、本建物の隅柱に当たることが判明したことから、SP3987aはSP0020aの掘方の一部と解釈したものである。

出土遺物は中期後半新段階の土器が出土した。その外S184は凹基式のサヌカイト製打製石鏃で先端が折損する。廃絶時期は中期後半新段階と判断した。

### (2) SB0039a

3区北端中央部で一部1区にまたがって検出した掘立柱建物である。1×3間の東西棟で梁間が2.7mとやや短く桁行は7.3mと、細長い平面形を呈す。推定面積は19.7㎡を測る。主軸は北から49度東に偏る。桁行側柱の並びが整わない箇所もあるが、近隣に該当する柱穴もなく、この復元が妥当と判断した。柱痕は直径20～25cmで南西隅柱のSP3262aは柱抜き取り後に30cm大の平石を投入して整地している。

出土遺物は1645の甕の口胴間の稜線が緩いことなど後期前半古段階の特徴をもつ土器が出土していることから、その時期の廃絶が想定できる。

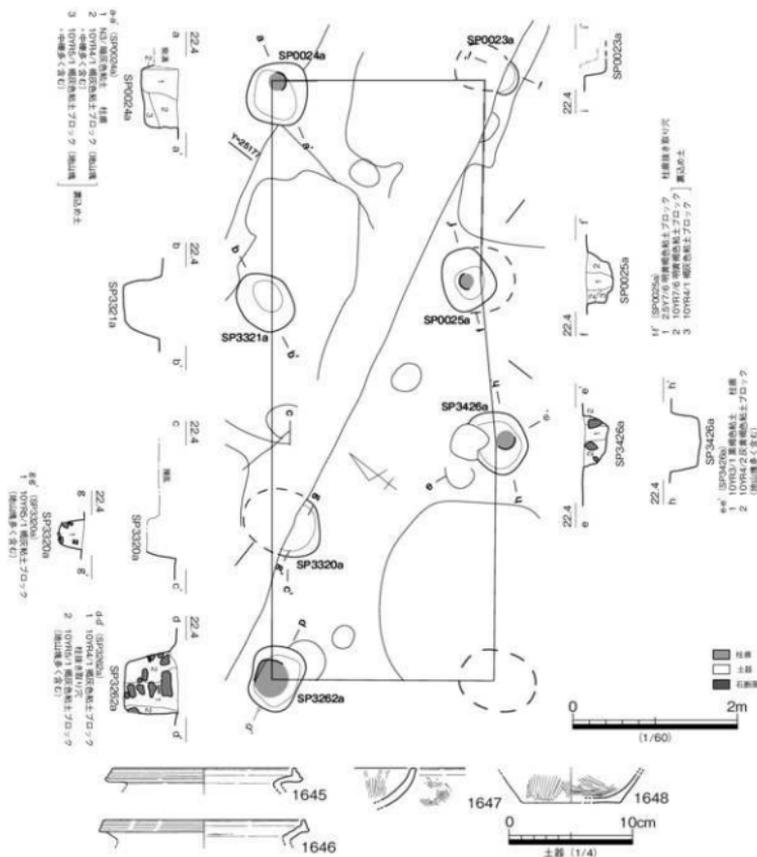
### (3) SB0047

3区西端中央部で検出した掘立柱建物である。1×2間の東西棟で、平成7年度調査の研修棟調査区にまたがる。調査区境で桁行の柱間長が異なるのは、平成7年度調査時の手書き図面に誤差を含むことが要因である。主軸は西から5度南に偏り、中期後半の堅穴建物SH3439aに切られる。柱穴は隅丸方形を意識した不整円形で、各所にコーナーや直線ラインを認める。梁間2.6m、桁行5.2m、推定床面積は13.5㎡を測る。柱痕は直径15～18cmで、検出面において柱抜き取り穴が確認できるものもあれば、柱痕が検出面で確認できるものもある。

出土遺物は中期後半中段階及び新段階の土器がある。S185は金山産サヌカイトの自然面を残す板状素材を敲打して剥ぎ取った、石理に沿う不定形剥片である。

以上の出土遺物から本建物は中期後半新段階に廃絶したものと判断した。





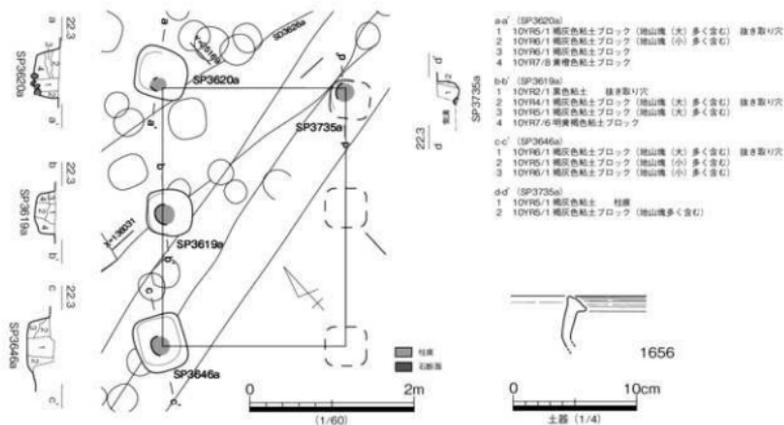
#### (4) SB0048a

3区西側中央付近で検出した掘立柱建物である。1×3間の東西棟で、中期後半新段階の竪穴建物 SH3439a を切る。主軸は北から72度東に偏る。桁行側柱の並びが整わない箇所もあるが、近隣に該当する柱穴もなく、この復元が妥当と判断した。柱痕は直径15cmを基本とする。南桁行の隅柱はどちらも柱を抜き取っている。

出土土器は後期前半古段階に属しており、建物廃絶時期を示すものと判断した。S186はサヌカイト製スクレイパーで板状素材に交互剥離を行い剥ぎ取った扇状の剥片の打面側に刃潰しを施し、剥離末端側には不規則な微細剥離痕を伴う使用痕が見られる。







### (6) SB1264ba

1区東側で検出した掘立柱建物である。1×2間の構造で梁間3.0m、桁行3.7mを測る。占有面積は11.1㎡。柱穴が大きい割に柱痕は最大でも直径20cm以下である。建物主軸は北から49度西に偏る。柱穴は隅丸方形を指向するが不定形のものもある。

出土遺物は壺底部と考えられる1659～1662がやや厚手で底縁縁が緩いものが目立つことから、後期前半古段階と判断した。

### (7) SB1265ba

1区中央で検出した1間×1間の大形建物である。梁間4.5m、桁行5.5m、面積は24.8㎡で建物主軸は北から70度西に偏る。柱穴は隅丸方形だが、掘方の主軸と建物主軸は合致しない。柱痕は直径15～30cmと幅があるが、記録写真を観察すると、概ね20cm以上の柱の太さを想定できる。他の建物と比べて一回り太い柱を使用していることから、重量のある上部構造が想定できる。

中期後半中段階の土器が出土したことから、その時期に廃絶した建物と判断した。

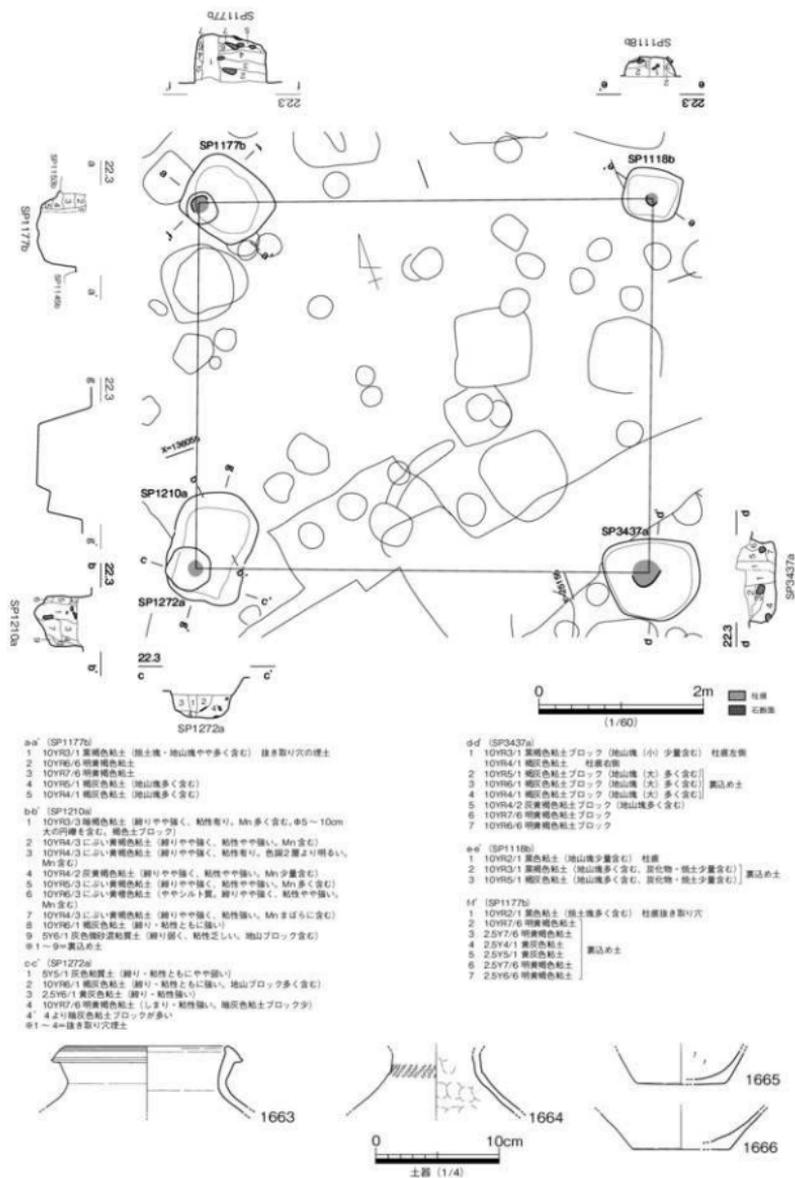
### (8) SB1268ba

1区中央北端で検出した掘立柱建物である。3基の柱穴の並びで、横列の可能性もなくはないが、遺構時期からみて掘立柱建物以外の横列等の遺構は確認されないことから、建物の一部と判断した。配置から1間×2間の東西棟と推察する。主軸は北から67度東に偏る。

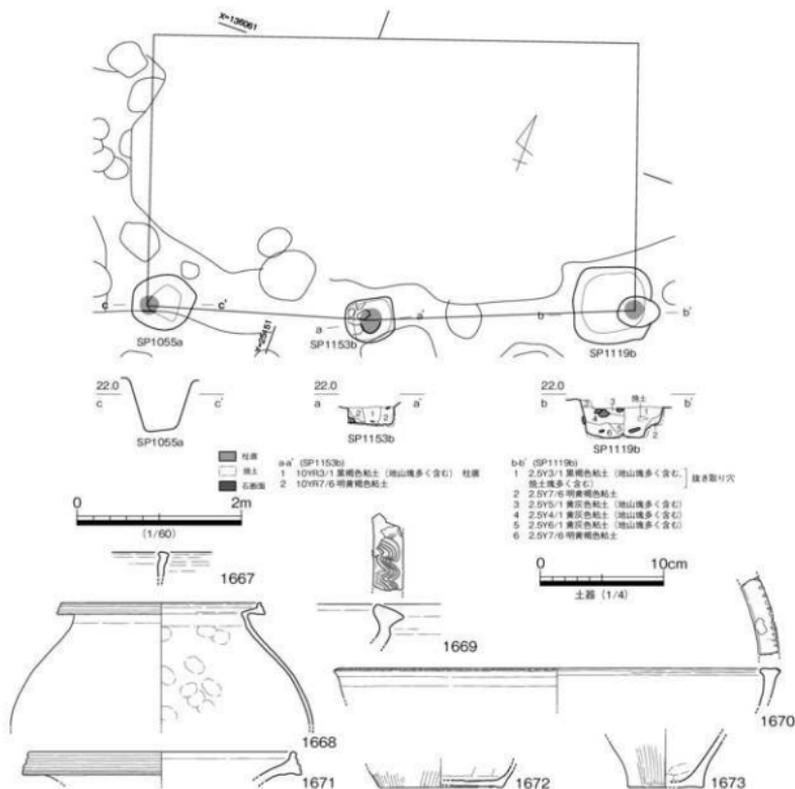
柱穴は隅丸方形を指向するが、不定形のものもある。柱は廃絶時に抜き取っており、痕跡から推定して直径は20cm以下である。

出土遺物は中期後半のものが多く、抜き取り坑出土の1671の器台は後期前半に属することから後期前半に廃絶した建物と判断した。





第 211 図 掘立柱建物 SB1265b 平・断面図 出土遺物実測図



第212図 掘立柱建物 SB1268b 平・断面図 出土遺物実測図

## (9) SB1347a

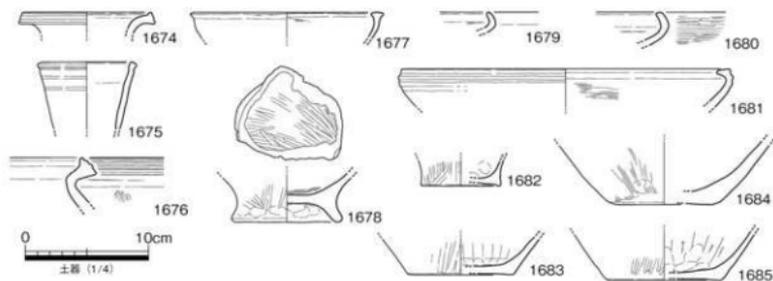
1区西側で検出した東西棟の掘立柱建物である。1間×3間で南西側は平成7年度調査の研修棟調査区にまたがる。主軸は北から58度東に偏る。梁間3.0～3.2m、桁行6.7m、東側2間分の桁行柱間は2.5m、西端のみ1.7～2.0mとやや狭い。面積は21.4㎡。柱痕から想定できる柱の太さは直径20cm以上を測る。大形が高床の倉庫と推察する。

出土遺物は中期後半のものが多く、1675・1676・1678・1684は後期前半に属することから後期前半古段階に廃絶した建物と判断した。

## (10) SB1348a

1区西端で検出した東西棟の掘立柱建物である。1間×2間で梁間3.2～3.5m、桁行5.1m、桁行の柱間は2.5mである。柱穴は隅丸方形を指向するが不定形なものを含む。柱痕から推定される柱の太さ





第214図 掘立柱建物 SB1347a 出土遺物実測図

は直径20cm以下である。小形の高床の倉庫と推察する。主軸は北から80度東に偏る。

竪穴建物 SH1020a と重複する位置にあり、その支柱穴 SP1236a は本建物の構成柱穴 SP1297a の埋没後に構築されていることが写真等でも明らかである。したがって本建物は竪穴建物 SH1020a の構築以前に廃絶した建物である。

出土土器は中期後半新段階が大半だが、1687のみ後期前半新段階に下る。その土器は写真等から検証すると SP1115a の柱抜き取り埋土上部より出土していることから、柱抜き取り時期の下限を示すものである。つまり、SB1348a は後期前半古段階までには廃絶しているものと考えられる。

#### (11) SB1349a

1区中央南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。南側柱列は平成7年度調査の研修棟調査区に含まれる。梁間1間(3.2m)×桁行2間(5.4m)の構造で、柱穴は東西に長い長方形を指向するが不定形なものが多い。主軸は北から84度西に偏る。柱痕から推定した柱の太さは直径20～25cmと太く、上屋は高床の倉庫と推察する。また、SP1312a と H7 研修棟調査区 P184 が桁行柱列に合致して存在する。さらに SP1151a は断面の写真・図面によると、掘方に前後2回の掘削が行われた痕跡が残る。このことから、当初、一回り小形の建物が存在し、その後建て替えにより一部は柱を抜き替えることで拡張した可能性が考えられる。すなわち、当初の1期に所属する柱穴は SP1312a・H7P184、2期の柱穴は SP1170a・SP1151a・SP1285a・H7P183・H7SP277・H7SK28 となる。

S187・S188 は凹基式のサヌカイト製打製石鏃で白色に風化することから縄文期の混在品である。S190・S191 は側縁に自然面を残すサヌカイト製の剥片・石核で、風化が軽度であることから本建物に伴うものと判断できる。同様に S192 は砂岩製砥石で#1500の研磨面を残す。

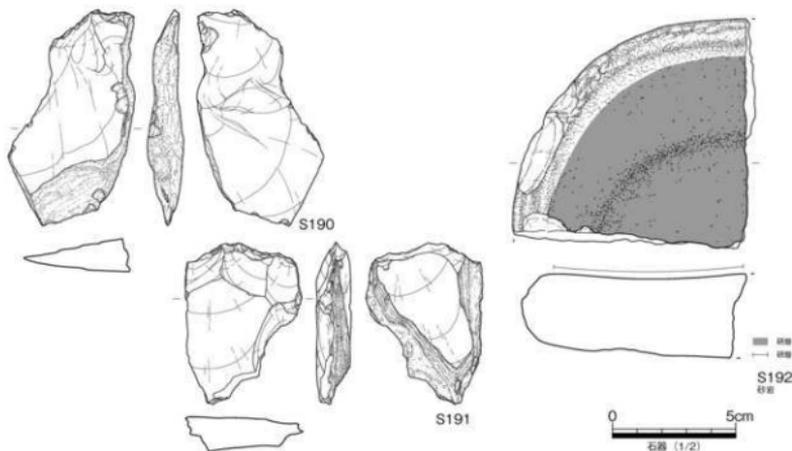
出土遺物は中期後半から後期前半までの幅があり後期前半に所属するものは2期の柱穴から出土していることから、中期後半新段階に構築され、1回の建て替えを経て、後期前半古段階までに廃絶した建物と判断した。

#### (12) SB1350a

1区西側で検出した掘立柱建物である。南側は平成7年度調査の研修棟調査区にまたがる。梁間1間(5.5m)×桁行2間(9.0m)の構造を有し、推定床面積49.5㎡と大形である。1間×1間の建物 SB1265b







第217図 掘立柱建物SB1349a 出土遺物実測図2

の丁度倍の大きさとなる。主軸は北から61度東に偏る。柱穴は方形で形状は整う。柱痕の記録等から推定される柱の太さは直径20cmを超えており、建物規模に比例して大形の上屋構造が存在したものと推定できる。

出土遺物は中期後半新段階の堯が出土しており、その時期の廃絶と判断した。

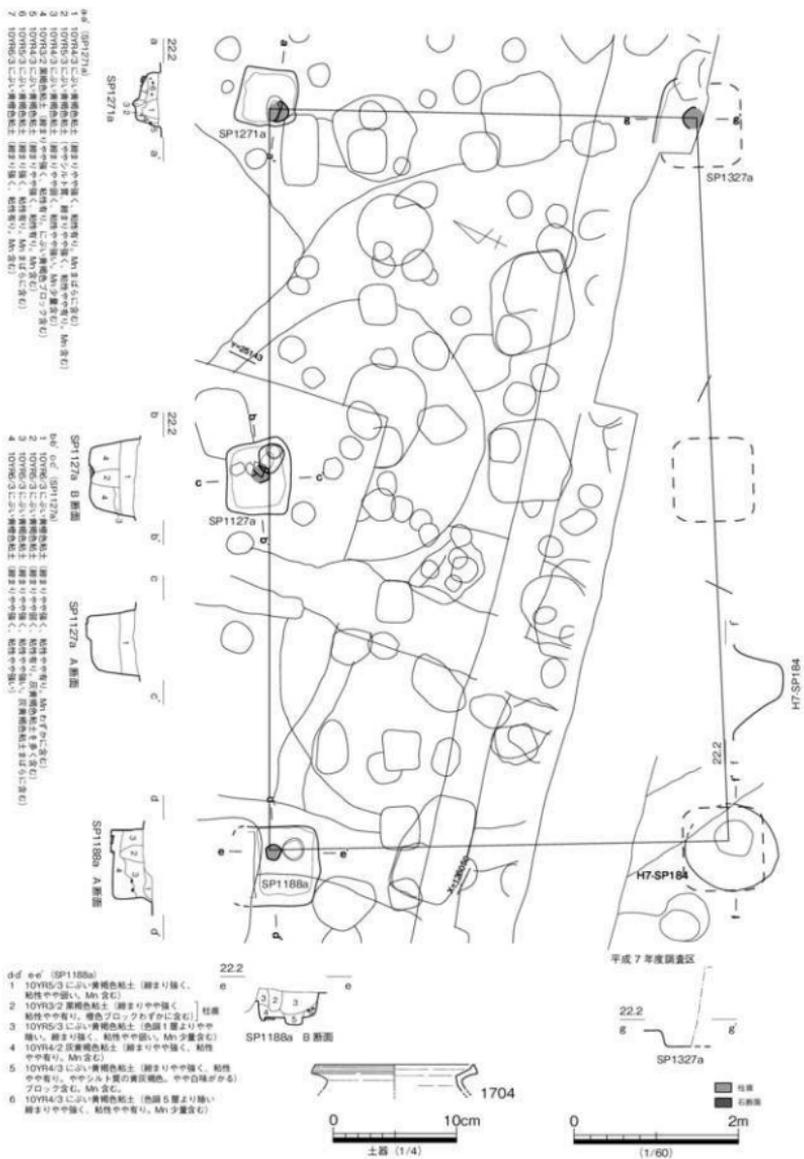
### (13) SB1351a

1区西側で検出した掘立柱建物である。梁間1間(3.6m)×桁行2間(8.3m)の構造を有し、推定床面積は約30㎡である。主軸は北から85度西に偏る。柱痕から推定できる柱の太さは直径15～20cmでやや細い。桁行柱間が4mと広いことから、重量に耐えられる構造ではなく、低床建物である可能性が高い。

出土遺物は中期後半中段階の土器が出土し、その時期の廃絶と判断した。

### (14) SB1352a

1区南端から平成7年度研修棟調査区から3区にかけて検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間1間(3.4m)桁行2間(8.7m)の構造を有し、推定床面積は約30㎡である。主軸は北から71度西に偏る。柱痕から推定できる柱の太さは直径15～20cmでやや細い。桁行柱間が4.2～4.5mと広いことから、重量に耐えられる構造ではなく、低床建物である可能性が高い。中期後半中段階の堯1707と1708の高杯脚が出土した。後者は凹線文の施文がなく、拡張端面上端が下方に突き出しやや内湾する形状を呈す。吉備南部の上東鬼川市1式に特徴的な形状である。後期初頭に位置づけられる。SH3021aでも示したとおり、層位的にはSH3021aに切られていることから、その床面で検出したSP3497aで出土した1708の高杯は本来SH3021aに含まれるものが混在したと考えるのが妥当であり、本建物は中期後半中段階の廃絶と判断した。そのほか、S193はサヌカイト裂石錐である。明らかな摩滅は認められない。



第218図 掘立柱建物SB1350a平・断面図 出土遺物実測図





(15) SB1353a

1区南端から3区にまたがって検出した掘立柱建物である。1間×1間の構造で平面形は若干台形を呈す。主軸は北から約60度西に偏る。柱間は3.2mを基本に一部が2.6mと狭い。柱穴は隅丸方形を指向するが掘方の主軸は、建物方向と合致しない。柱痕から復元した柱の太さは直径15～24cmとやや太い。規模と柱の太さからある程度の高床で高層の建物と判断した。

出土遺物は1709の壺の口縁部に凹線文が施文されており、中期後半に属すが、凹線文は細く出現期の形状である。そのほかの土器は口縁部に凹線文を施すものではなく、突帯貼付による文様が主体であることから、全体としては中期後半古段階の土器群といえる。S194はサヌカイト製の大型の石核で板状素材から交互剥離で剥片を採取し、最終的には自然面を敲打して石理に平行する剥片を横に打点をずらしながら剥離して終えている。それ以上の分割は行っていない。

以上の出土遺物から本建物は中期後半古段階に廃絶した当調査区では比較的古い建物といえる。

(16) SB1354a

1区中央南側で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間1間(2.9m)×桁行3間(5.3m)の構造で桁行柱間1.7～1.8mと短い。主軸は北から70度西に偏る。柱痕から復元できる柱の太さは直径20～25cmと太く、重量物に耐えうる構造を備える。高床の倉庫と考える。

出土遺物は中期後半新段階のものが多く、その時期に廃絶したものと判断した。S195の石鏃は側縁に鋸歯状調整加工を施す。

(17) SB1368b

1区東端で検出した南北棟の掘立柱建物である。主軸は北から10度西に偏る。梁間1間(3.7m)×桁行2間(6.1m)の構造で、柱痕から復元できる柱の太さは直径15～20cmで、低床の建物と判断した。なお、SP1036cを切ってほぼ同規模の柱穴SP1035が構築されているが、周囲にこれと組みあう遺構が認められないことから、本建物の一部柱の据替を伴う改修の痕跡と推察する。

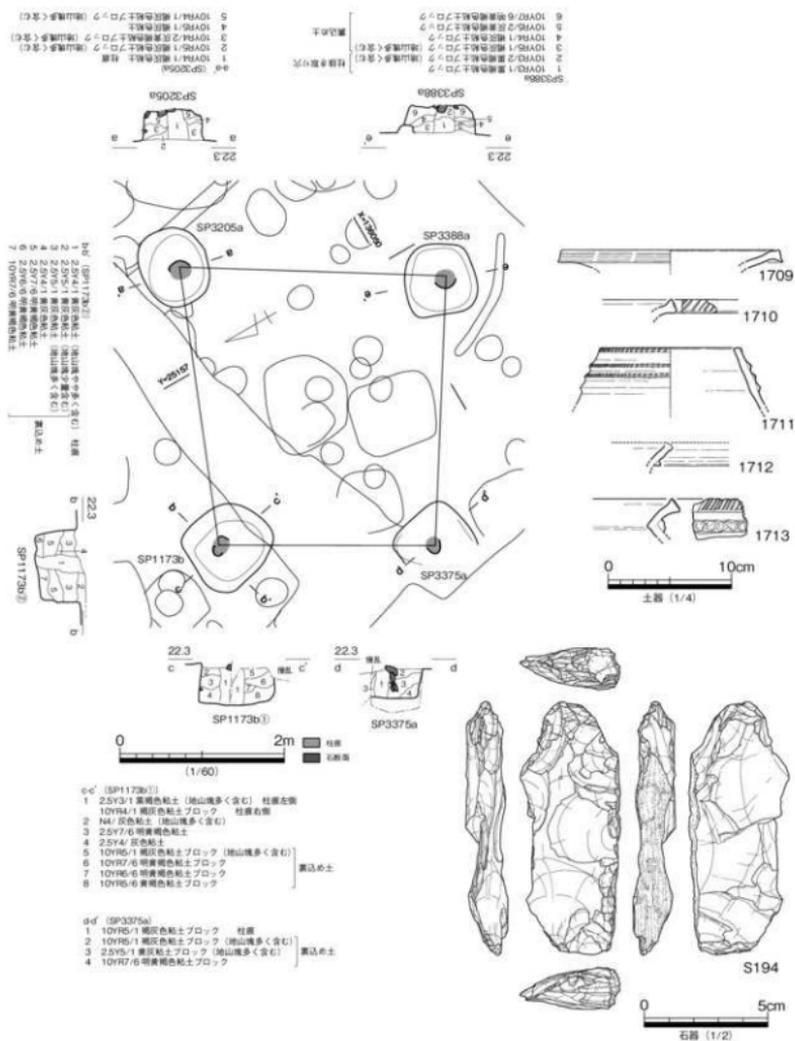
出土遺物は中期後半新段階に属することから、その時期廃絶した建物と判断した。S196はSP1035cの根石に転用された砂岩の大型台石である。上面に敲打痕と#600の研磨痕が認められる。

(18) SB2392a

2区東端で検出した南北棟の掘立柱建物である。西側柱列のみ調査区内で検出し、同じ場所で多数の遺構と重複する。まず後期前半古段階の竪穴建物SH2153a及び後期前半中段階のSH2346aと重複し、それより新しい。本建物に後続するものが後期前半新段階のSH2010a、後期後半古段階のSH2075a、さらにそれに後出する後半新段階のSH2038aである。

桁行3間(5.8m)で柱間は約2m、柱痕から想定される柱の太さは直径15cmである。低床の建物である可能性が高い。主軸は北から20度西に偏る。

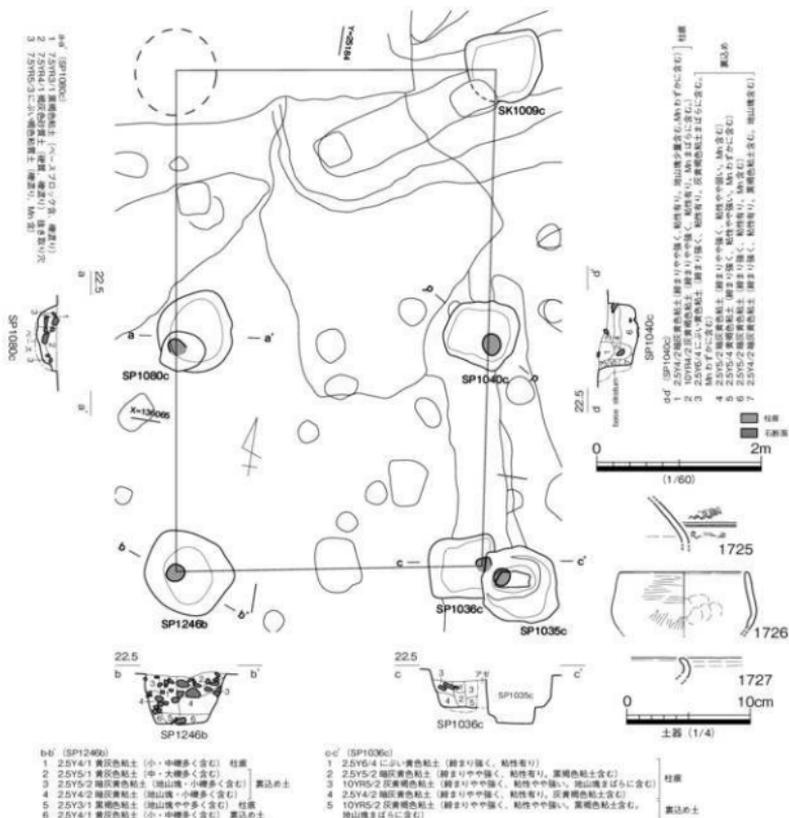
出土遺物は後期前半新段階から後期後半古段階の土器で1738は内面に朱が付着する。これはSP2336aで出土したもので、もともとSH2153aに含まれたものが混在したものと推察する(138頁参照)。また、1730の櫛描文の壺胴部片はSH2075aにも同一個体の可能性がある土器が出土している。本建物より古い建物からの混在である。



第 221 図 掘立柱建物 SB1353a 平・断面図 出土遺物実測図

以上の出土遺物から本建物は後期後半古段階の SH2075a 構築前に廃絶した建物と判断した。





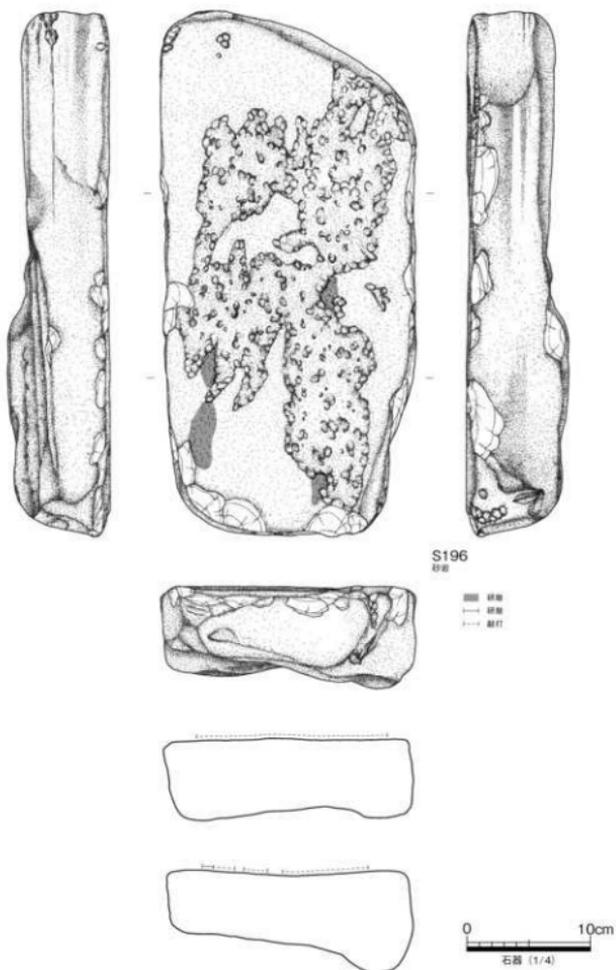
第 223 図 掘立柱建物 SB1368b 平・断面図 出土遺物実測図 1

## (19) SB2393a

2区東側で検出した南北棟の掘立柱建物である。竪穴建物 SH2010a・SH2057aと重複する。梁間1間(24m)、桁行2間(3.2m)の小形の建物で、柱痕から推定できる柱の太さは直径15cmである。柱穴は西側柱列が円形、東側柱列が隅丸方形を指向する。主軸は北から28度東に偏る。

柱穴の埋土が一般的な竪穴建物の埋土と似て暗褐色系であることから、切り合いの把握が難しいが、調査記録からは重複する竪穴建物が埋没した後に構築された建物と考えられる。中期に属す建物を構成する柱穴埋土の裏込め土が概ね基盤土に類似する黄色系であることと異なり、暗褐色系であることはその推察を支持するものである。

出土遺物は図示のとおり後期前半から後期後半古段階の遺物が多数出土しているが、その中で1742の壺(高杯口縁の可能性)、1749の甕、1755の高杯は後期後半新段階に下る資料である。それ以外の土



第 224 図 掘立柱建物 SB1368b 出土遺物実測図 2

器は、それぞれ切られた竪穴建物に本来は属したものであろう。

以上の出土遺物から本建物は後期後半古段階以後に構築され、後期後半新段階に廃絶したと判断した。



した範囲である。

柱穴は大形で隅丸方形を呈し、桁行柱間は25～28m。柱痕から推定できる柱の太さは直径20cmである。高床の建物と推察する。主軸は北から70度東に偏る。

出土遺物は中期後半新段階の土器が出土しており、廃絶時期を示す。

#### (21) SB3302a

3区中央西寄りで見出した東西棟の掘立柱建物である。主軸は北から80度西に偏る。梁間1間(3.5m)、桁行2間(5.5m)で柱穴は大形で隅丸方形を呈す。柱痕から推定できる柱の太さは直径25～30cmと太い。桁行柱間は2.7～2.8mを測り、高床の建物と推察する。

出土遺物は中期後半新段階の土器が多い。そのなかで、SP3280a出土の1775は周防地域で中期後半に出現する北部九州系鋤形口縁(宮ヶ久保遺跡1998におけるTB I型)壺の口縁部に該当し、胎土は本遺跡に通有の花崗岩風化土壌に由来する粘土に赤色粒子を混和した在地ものであることから、中期後半段階における人の移動を証する資料である。

#### (22) SB3303a

3区中央やや北寄りで見出した東西棟の掘立柱建物である。主軸は北から83度西に偏る。梁間1間(3.0m)、桁行4間(約7.2m)で柱穴は大形で隅丸方形を指向する。柱痕から推定できる柱の太さは直径25cmと太く、桁行柱間は1.7～2.0mと狭い。このことから高床の倉庫建物と推察する。

出土遺物は壺・甕の口縁部に細い出現期の凹線文が認められるが、甕の大半は口縁拡張が面取り程度にとどまっており、幅広い施文部を形成し凹線文を施文するまでに至っていない中期後半古段階の土器群で、建物の廃絶時期を示す。

1797は土器片転用の紡錘車である。S199・S200はサヌカイト製石核である。

#### (23) SB3375b

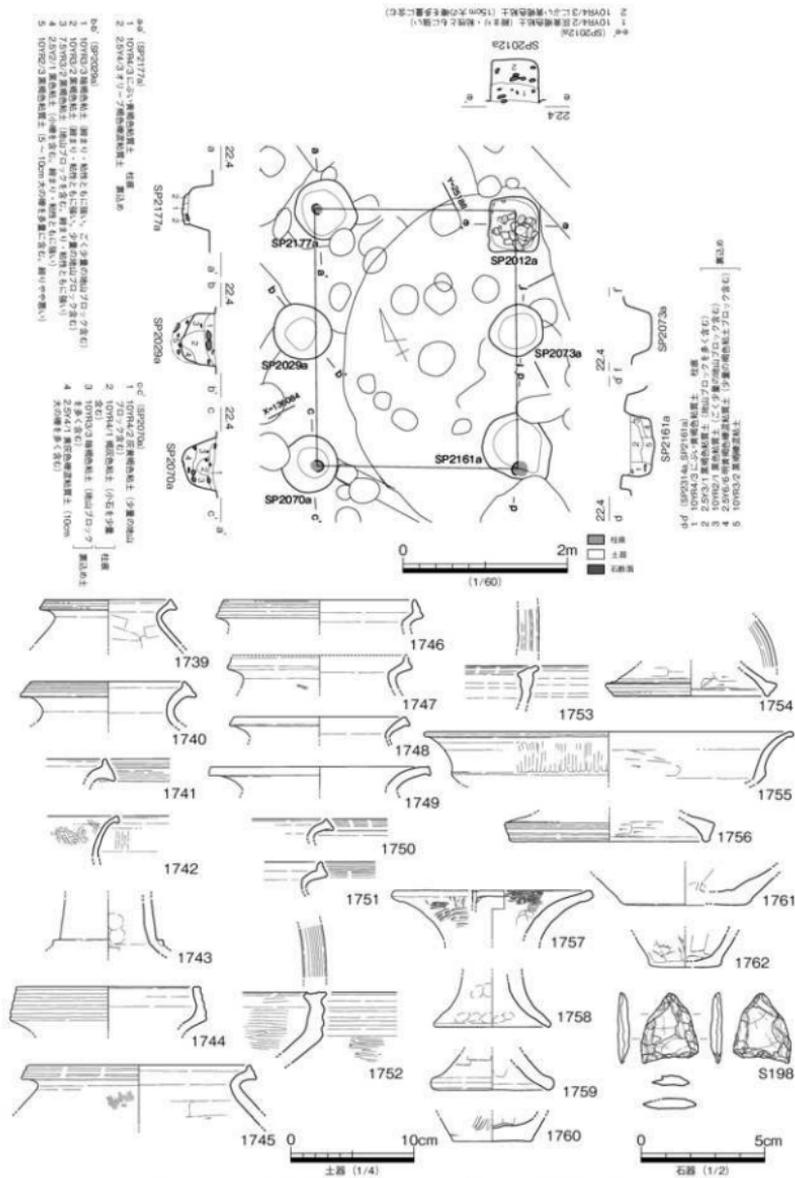
3区東側で見出した東西棟の掘立柱建物である。建物主軸はほぼ正方位。梁間1間(3.0m)、桁行2間(約5.3m)で、西側の梁間が狭く、台形状の平面形を呈す。柱穴は隅丸方形を指向するが不定形ものが多い。柱痕から推定できる柱の太さは直径20cmで、桁行柱間は2.4～2.6mを測る。このことから低床の建物と推察する。

出土遺物は後期前半新段階の土器が含まれており、建物廃絶時期を示す。S201は横形の石匙で白色に風化が進行することから縄文時代後期ごろの遺物が混在したものと推察する。

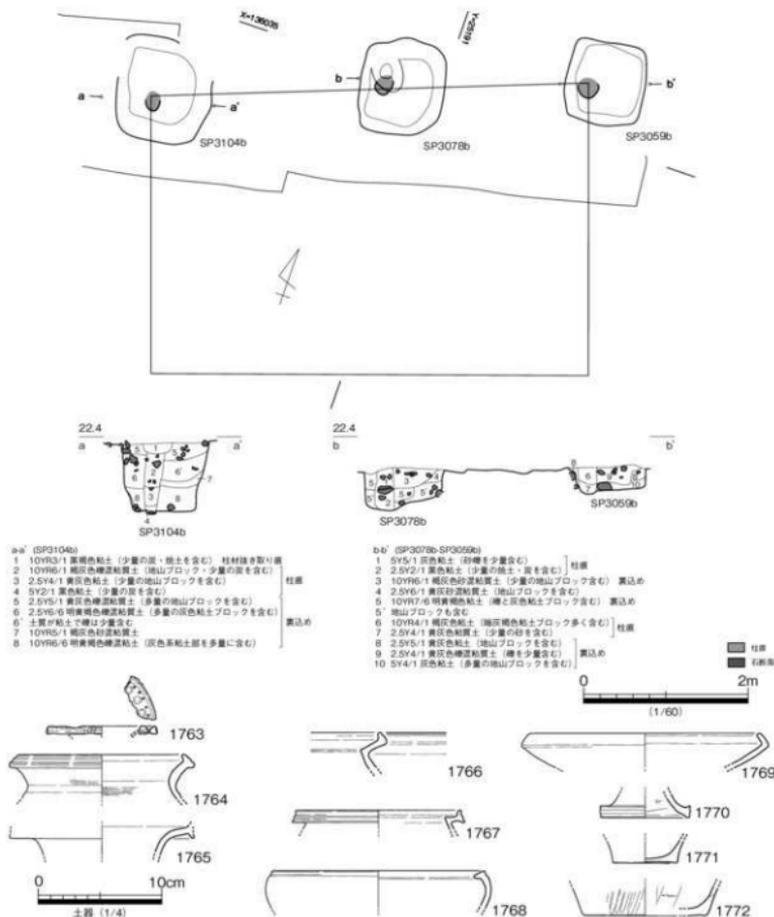
#### (24) SB3382a

3区中央やや西側で見出した南北棟の掘立柱建物である。主軸は北から22度西に偏る。梁間1間(3.4m)、桁行3間(約7.2m)の構造である。柱穴は小形円形で、柱痕から推定できる柱の太さは直径20cmである。桁行柱間は2.3～2.7mを測る。柱の直径に対して柱穴規模が小さいことから、柱の長さに限界があり低床の建物と推察する。

出土遺物は後期前半新段階の土器が含まれており、建物廃絶時期を示す。



第226図 掘立柱建物SB2393a平・断面図 出土遺物実測図

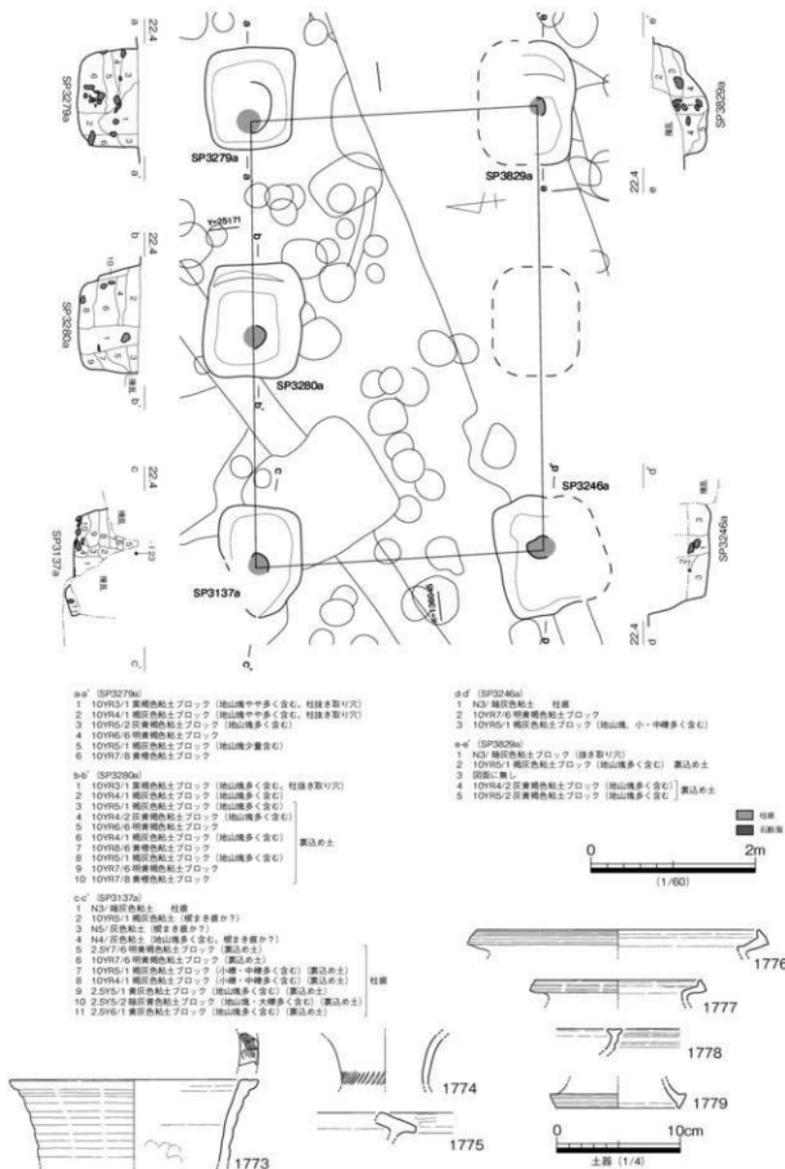


第227図 掘立柱建物 SB3292b 平・断面図 出土遺物実測図

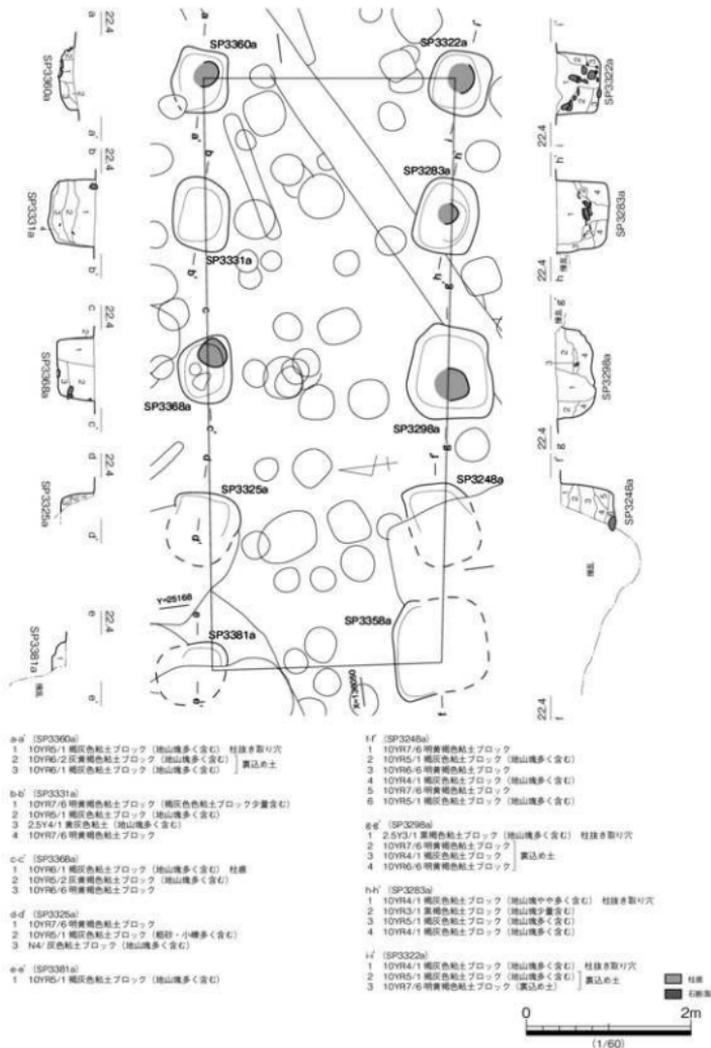
(25) SB3388b

3区中央東よりで検出した掘立柱建物である。梁間1間(3.3m)、桁行2間(約4.9m)の構造である。主軸は北から75度東に偏る。柱穴は隅柱が大きく、間柱が小さい。柱痕から推定できる柱の太さは直径20cmである。桁行柱間は22~2.5mを測る。隅柱の柱穴規模が大きいため桁行に桁支えの間柱が付属する高床の倉庫建物と推察する。

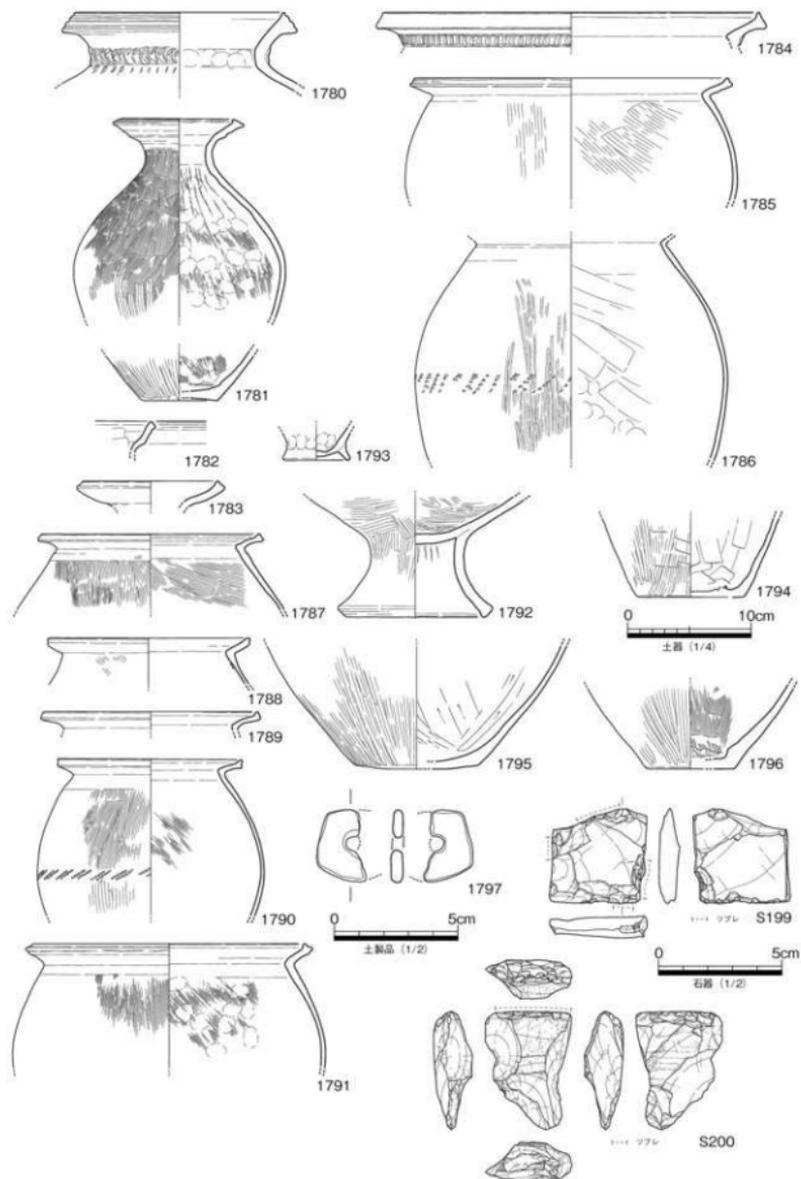
出土遺物は中期後半新段階の土器が含まれており、建物廃絶時期を示す。S202は流紋岩製砥石である。砥面は表面が# 8000、側面が# 4000と平滑度が高い仕上げ砥である。上面に傷溝がみられる。



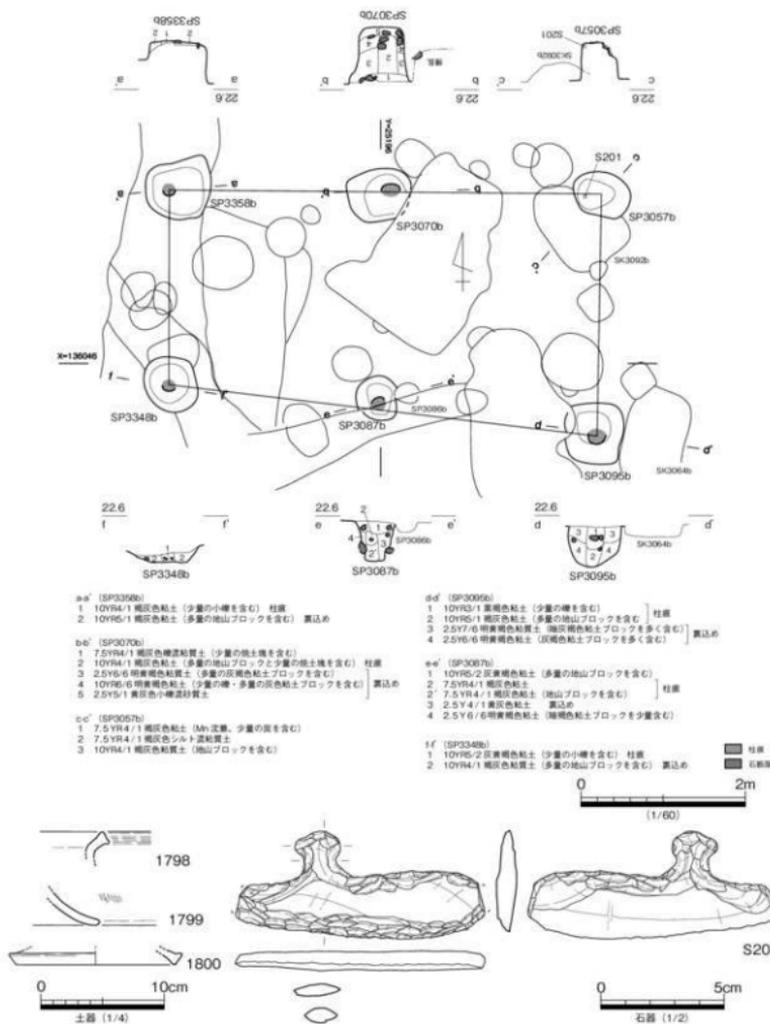
第228図 掘立柱建物 SB3302a 平・断面図 出土遺物実測図



第 229 図 掘立柱建物 SB3303a 平・断面図



第230図 掘立柱建物SB3303a出土遺物実測図



第 231 図 掘立柱建物 SB3375b 平・断面 出土遺物実測図

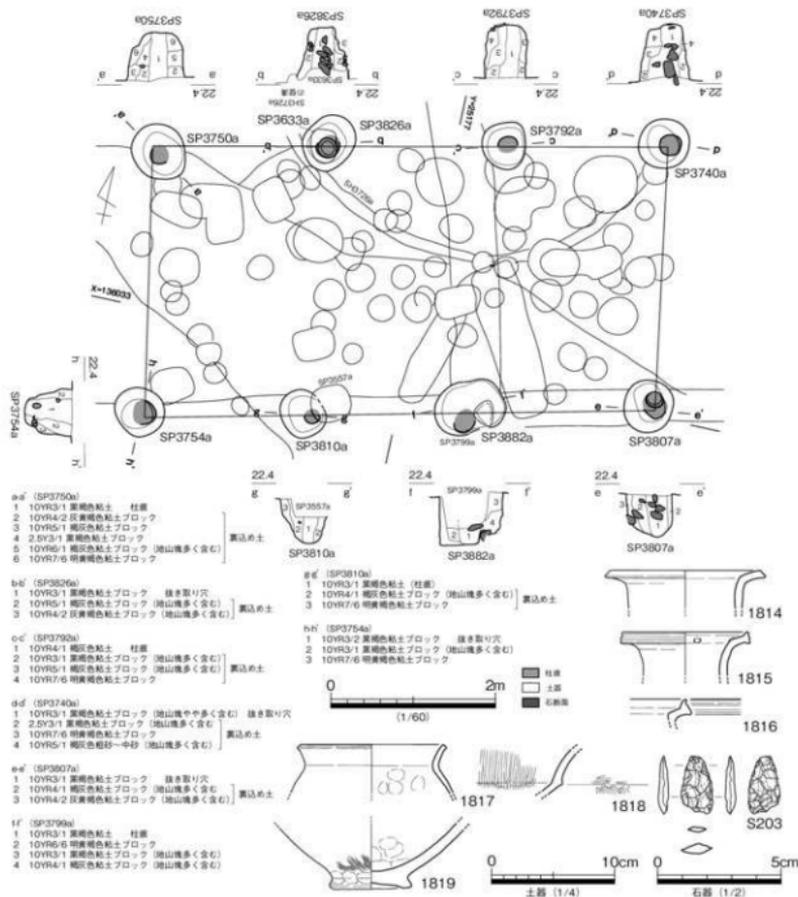




## (26) SB3913a

3区中央南端で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間1間(3.2m)、桁行3間(約6.3m)の構造である。主軸は北から76度東に偏る。中期後半新段階の堅穴建物SH3726aと重複し、後出する。柱穴は小形円形で、柱痕から推定できる柱の太さは直径20cmである。桁行柱間は2.0~2.2mを測る。柱の直径に対して柱穴規模が小さいことから、柱の長さに限界があり低床の建物と推察する。廃絶に当たっては柱を抜き取り10~20cm大の礫を投入して整地する。

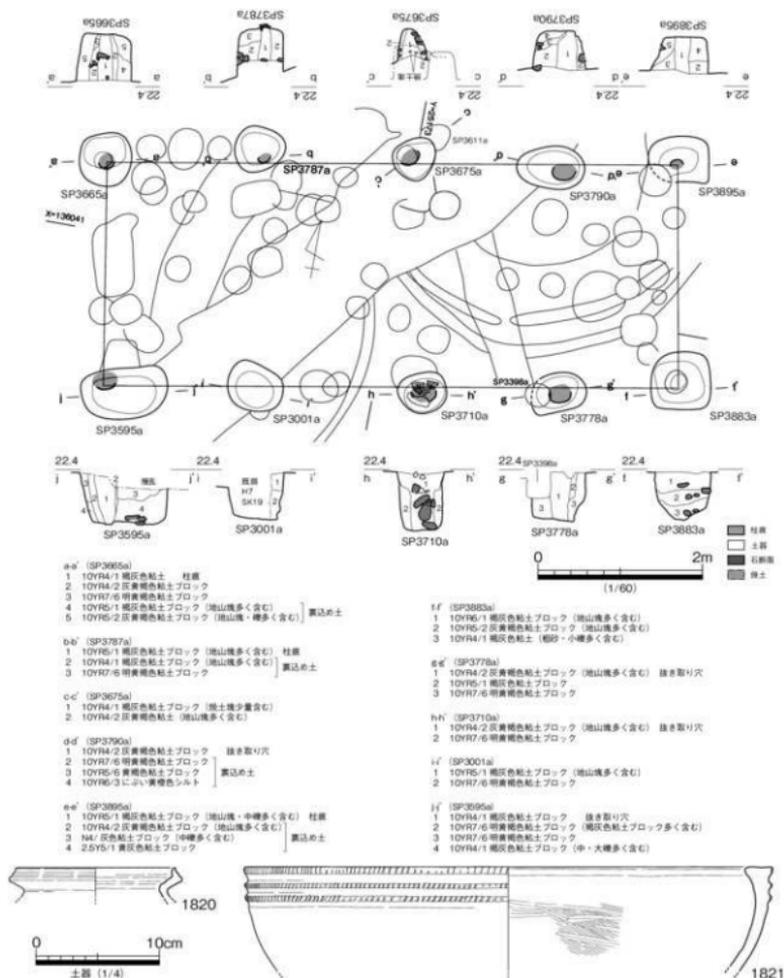
出土遺物は1814の長頸系の広口壺、1817の口縁拡張しない甕、1818の外反口縁の高杯等後期後半古段階の土器が建物廃絶時期を示す。



第234図 掘立柱建物SB3913a平・断面図 出土遺物実測図

(27) SB3914a

3区中央やや西寄りで検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間1間(2.7m)、桁行4間(約7.0m)の構造である。主軸は北から80度東に偏る。後期後半古段階の竪穴建物SH3363aと重複し先行する。また、中期後半の竪穴建物SH3474aに後出する。柱穴は一部が長径1mを超える大形だが、そのほかは直径0.6mほどの円形・楕円形の柱穴である。柱痕から推定できる柱の太さは直径20~25cmである。



第235図 掘立柱建物SB3914a平・断面図 出土遺物実測図



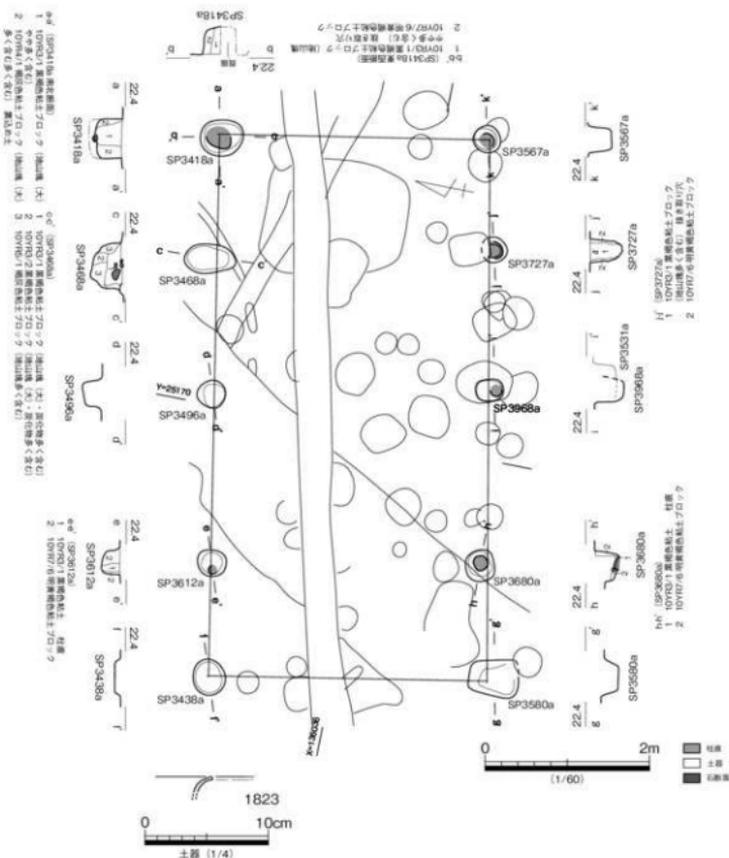
石・黒雲母を含み備中か高松平野産で、後期前半古段階に属する。

出土遺物より本建物は後期前半古段階に廃絶したものと判断した。

### (29) SB3916a

3区中央やや西寄りで検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間1間(3.3m)、桁行4間(約6.6m)の構造で、主軸は北から79度東に偏る。柱穴は小形円形で柱痕から推定できる柱の太さは直径10～15cmと細い。桁行柱間は1.3～2.2mを測る。柱の太さと構造から低床の建物と推察する。

1823は口縁端部の拡張を行わない後期後半に出現する堯口縁である。後期後半以後に構築された建物と判断した。

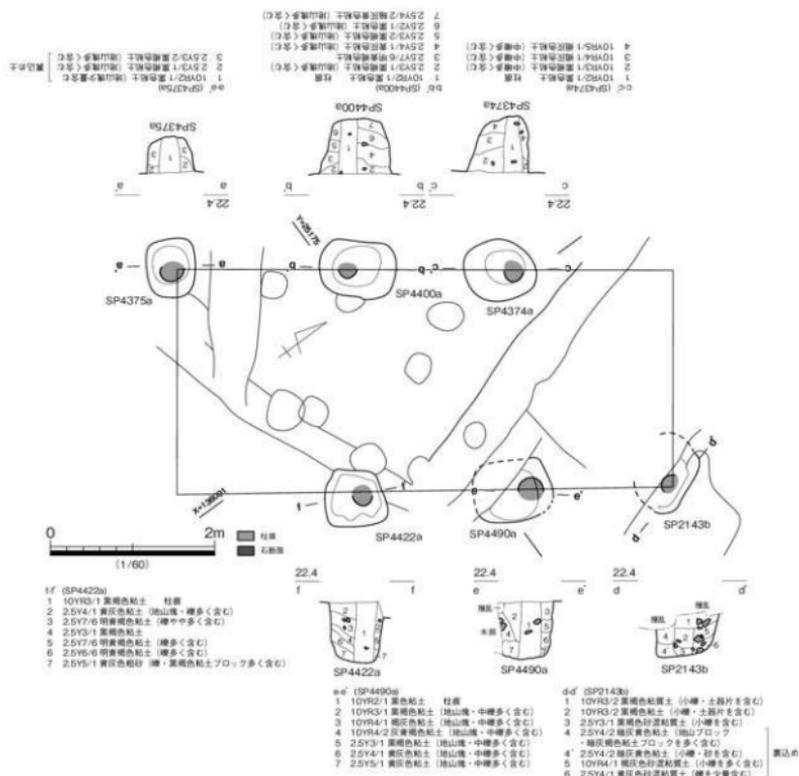


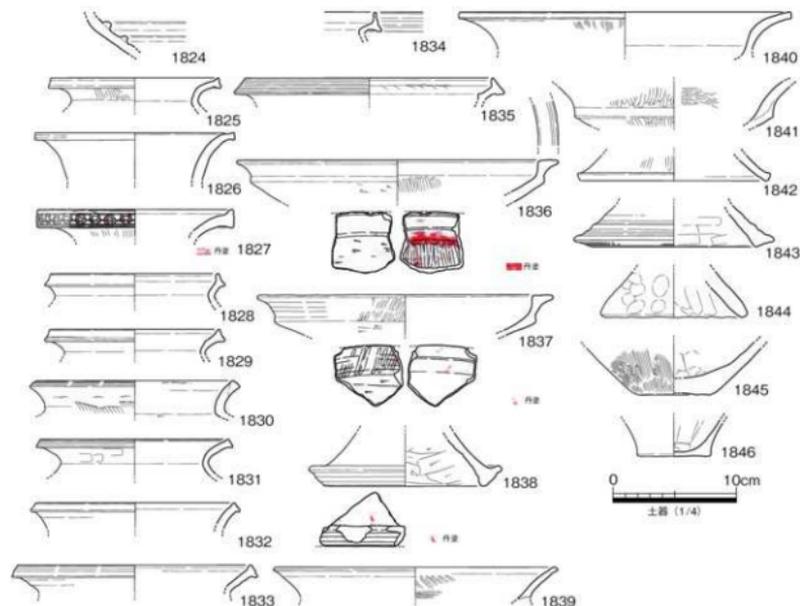
第 237 図 掘立柱建物 SB3916a 平・断面図 出土遺物実測図

## (30) SB4505a

4区南西隅で検出した掘立柱建物である。調査範囲外にも広がる可能性があり、全体形状は不明だが、現状では梁間1間(2.7m)、桁行3間(6.0m)の構造を呈す。主軸は北から36度東に偏る。桁行柱間は1.8~2.0mとやや短く、柱痕から推定できる柱の太さは直径20~25cmと太い。柱穴の規模は長辺0.75~0.9mの隅丸長方形を指向しており、やや大形の柱穴規模である。このことから、重量物を収納する高床の倉庫建物である可能性が高い。

出土遺物は後期前半古段階から新段階の土器が出土しており、柱痕出土のものは1825・1826・1830~1832・1839等、後期前半新段階にまとまることから、後期前半新段階に廃絶した建物と判断した。このうち、1824は肩部に突帯を貼付する北部九州から西部瀬戸内地域にかけての、1827は近畿地域、1834・1835は備後地域の影響もとに製作された搬入系土器である。1836・1837の高杯は内外面丹塗。1838の脚部も外面に丹塗が残る。



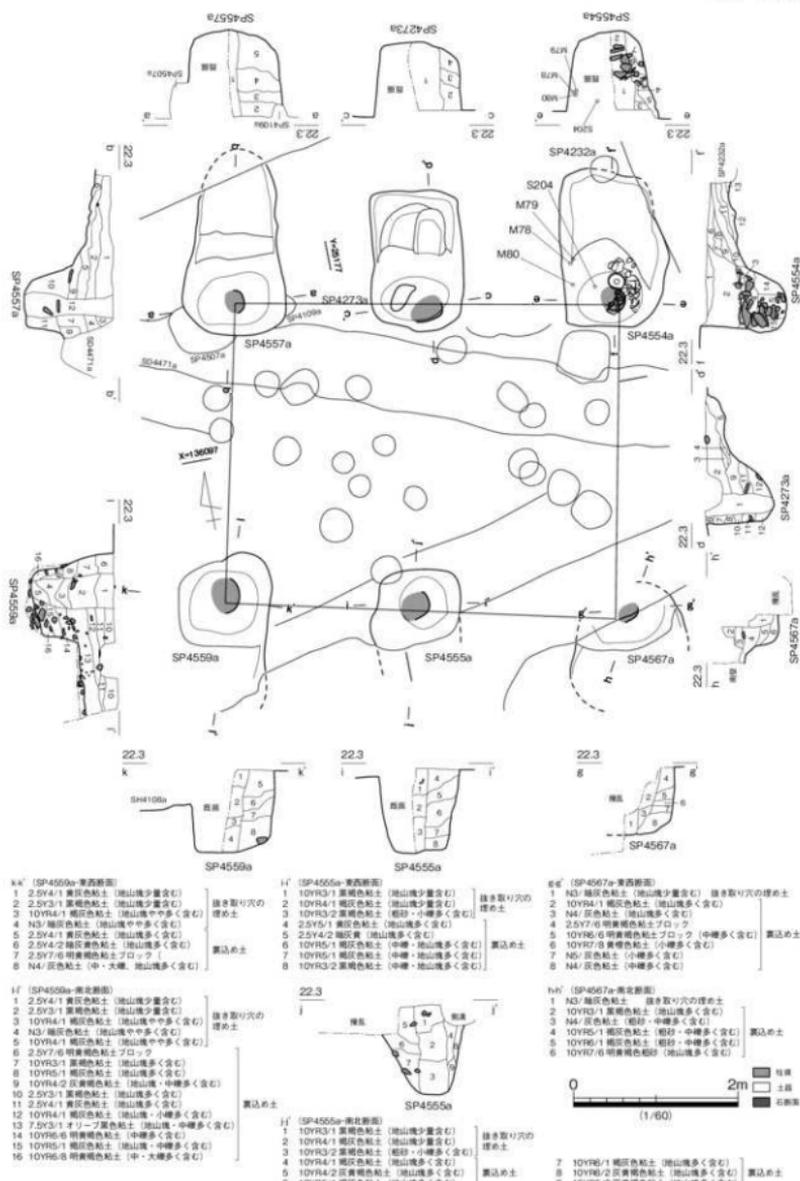


第 239 図 掘立柱建物 SB4505a 出土遺物実測図

(31) SB4566a

4 区南東で検出した掘立柱建物である。梁間 1 間 (3.7m)、桁行 2 間 (4.7 m) の構造で、桁行柱間は 2.3 ~ 2.4 m、建物主軸は北から 76 度西に偏る。柱痕から推定できる柱の太さは直径 25 ~ 30cm と太い。柱穴の規模は長辺 2.0 m、短辺 1.3 m の隅丸長方形で、柱痕は一方に偏り、柱穴掘方底面は対辺に向けて次第に浅くなる傾斜断面の形状を呈す。これは太く長い柱を柱穴に設置するために行われた技法であり、本建物が高層の構造物であったことを証す。さらに廃絶に当たって 10 ~ 30cm 大の礫とともに、遺存状態が良好な壺・高杯等の多数の土器を意図的に投入する祭祀行為が認められる。これは本建物が特別な建物であったことを証す。

本遺跡では高層構造物と推察できる建物をこれまでも遺構及び絵画土器において確認しているが、柱穴規模全体を大型化することにより大形柱設置の機能を果たすものが多い。基礎構造として柱穴掘方が傾斜断面の形状を呈する本遺構は、深く柱穴を据えるために必要以上に柱穴掘方を拡大せず、省力的に機能を果たす手法を採用したものと評価できる。第 25 次調査 I - 2 区 SB2001 の高層構造物は梁間 1 間×桁行 1 間の構造で構築されていた。その長い桁行を維持するための構造としては、複数の長大な桁柱を伴う複雑な上部構造を必要としたものと推察する。一方で本建物は桁行を 2 間とし桁行に間柱を入れることにより、通し柱を主体にした構造補強が行われた。これにより桁柱や小屋組み自体は単純化でき、通し柱以外の長大な建材を必要としない。柱材の入手においても省力化が行われた可能性が考えられる。

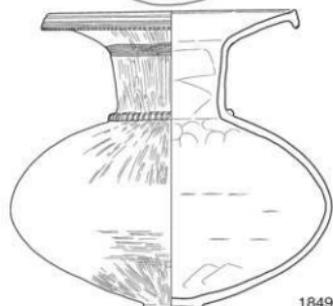
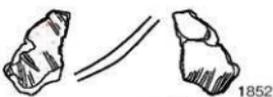
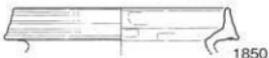
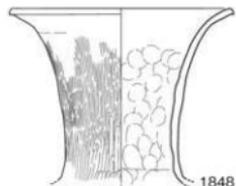
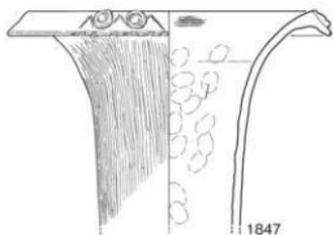


第240図 掘立柱建物SB4566a平・断面図

- ##f (SP4567a-東西断面)
- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む) 鎌倉取り穴の埋め土
  - 2 10YR6/1 褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 3 10YR4/2 黄褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 4 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む)
  - 5 2.5Y3/1 黄褐色粘土 (中・大塊、地山塊多く含む)
- ##g (SP4567b-南北断面)
- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む)
  - 2 2.5Y4/2 黄褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 3 10YR4/1 褐色粘土 (地山塊少量含む)
  - 4 10YR3/1 黄褐色粘土 (地山塊少量含む)
  - 5 10YR2/2 黄褐色粘土 (地山塊・中塊多く含む)
  - 6 2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (フィラ) 埋め土
  - 7 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊少量含む)
  - 8 2.5Y5/1 黄灰色粘土 (中塊多く含む)
  - 9 2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (埋め、中塊や中多含む)
  - 10 2.5Y3/2 黄褐色粘土 (中塊、地山塊多く含む)
  - 11 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (中塊、地山塊多く含む)
  - 12 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊や中多含む)
- ##c (SP4273a-東西断面)
- 1 2.5Y3/1 黄褐色粘土 (地山塊・中塊多く含む) 鎌倉取り穴の埋め土
  - 2 10YR4/1 褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 3 10YR4/2 黄褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 4 N6/ 灰色粘土 (中・大塊、粗砂・地山塊多く含む) 埋め土

- ##d (SP4273b-南北断面)
- 1 2.5Y3/1 黄褐色粘土 (地山塊・中塊多く含む) 鎌倉取り穴の埋め土
  - 2 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む)
  - 3 2.5Y5/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む)
  - 4 2.5Y4/2 黄褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 5 2.5Y5/1 黄灰色粘土 (小・中塊多く含む)
  - 6 10YR3/1 黄褐色粘土
  - 7 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む)
  - 8 2.5Y3/1 黄褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 9 10YR4/1 褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 10 10YR6/1 褐色粘土 (小塊・粗砂や中多含む)
  - 11 10YR2/2 黄褐色粘土 (中・大塊多く含む)
  - 12 10YR6/1 褐色粘土 (中・大塊多く含む)

- ##f (SP4566a-東西断面)
- 1 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊、大・中塊多く含む)
  - 2 2.5Y3/1 黄褐色粘土 (地山塊、大・中塊多く含む)
  - 3 2.5Y5/1 黄褐色粘土
  - 4 10YR6/1 褐色粘土
  - 5 2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (フィラ)
  - 6 10YR4/1 褐色粘土 (フィラ) 地山塊・中塊多く含む
  - 7 N3/ 緑灰色粘土 (地山塊・中塊多く含む) 埋め土
- ##f (SP4566b-南北断面)
- 1 10YR3/1 黄褐色粘土 (地山塊少量含む)
  - 2 10YR4/1 褐色粘土 (地山塊少量含む)
  - 3 10YR3/2 黄褐色粘土 (地山塊少量含む)
  - 4 2.5Y3/1 黄褐色粘土 (地山塊、中・大塊多く含む)
  - 5 10YR3/1 黄褐色粘土 (地山塊、中・大塊多く含む)
  - 6 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む)
  - 7 2.5Y3/1 黄褐色粘土 (地山塊多く含む)
  - 8 2.5Y4/2 黄褐色粘土 (小・中塊多く含む)
  - 9 10YR3/1 黄褐色粘土 (小・中塊や中多含む)
  - 10 10YR4/1 褐色粘土 (地山塊や中多含む)
  - 11 10YR2/2 黄褐色粘土 (中塊多く含む)
  - 12 10YR7/6 明黄褐色粘土 (フィラ)
  - 13 10YR6/6 明黄褐色粘土 (フィラ)
  - 14 5Y3/1 オリーブ黄褐色粘土 (地山塊、小・中塊多く含む)
  - 15 5Y3/1 オリーブ黄褐色粘土 (地山塊、小・中塊多く含む)



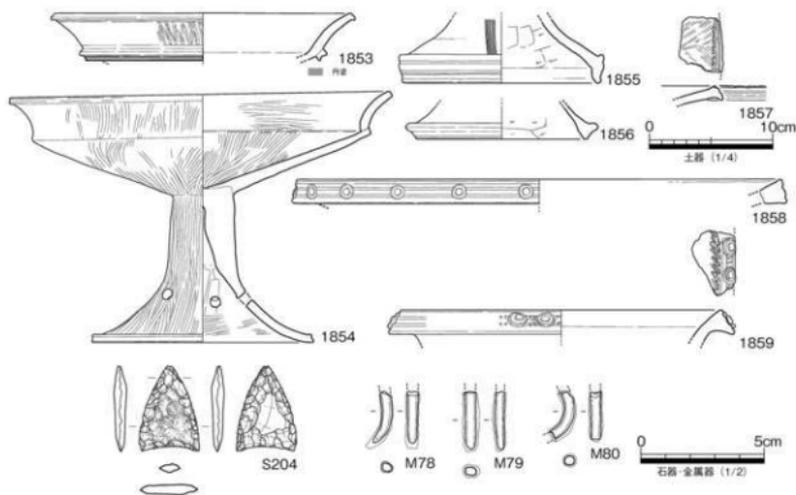
第 241 図 掘立柱建物 SB4566a 出土遺物実測図 1

## ＜出土遺物＞

出土遺物は上述のように遺存状態が良好な土器が出土した。1847・1848は長頸壺である。1847の口縁は斜め下方に垂下し下端に細かな刻目を施し、端面には山形文を太目にヘラ描きし上から竹管円形浮文を貼付する。1848は口縁部の拡張がなく頸部からスムーズに口縁部が開く形状の壺で、口縁端部を除けば両者の形状や調整手法は似通っている。1849は玉葱形の胴部に直立する頸部に接続しさらに頸部上端で屈曲して口縁部が直線的に開き、口縁端部は下方に拡張して端部に凹線文を施文し、下端部に細かな刻目を施す形態である。頸部の上下の器形境に刻目突帯及び複雑ヘラ描き文を施文する。また口縁内面に小形の竹管刺突文をこまかなピッチで回している。底部は円盤貼り付け状の平底を呈す。

1850は口縁部が上方へ大きく拡張する備後系の甕、1851は口縁胴部境の内面稜線が目立たず底部が安定した平底の甕である。1852は器壁が厚い大形鉢と推定できる土器片で内面にヘラミガキ調整が残り、朱が付着する。1853は口縁下端に断面「M」字の突帯を貼付する装飾高杯である。突帯上面にのみ焼成前にベンガラを塗布した丹塗土器である。1854は分割整形の高杯である。裾端部は面取りを行うが拡張しない。杯部内面は放射状にヘラミガキを施す。1855は裾端部を下方に大きく拡張する備後系の高杯である。吉備地域と共通する縦位梯描文を施文する。1856は拡張した裾端部の上端を外側下方に巻き込むように仕上げる技法は吉備地域の影響がうかがえる。1857～1859は凹線文・刻目文・竹管円形浮文等を多用する大小の器台片である。

このほか SP4554a の裏込め土より直径4～5mmの断面円形の棒状鉄片が3片（M78～M80）出土している。いずれも断面法量が等しく緩やかなカーブをもつ点で共通し同一個体の分割片と推察する。残存部から復元すると元の鉄製品の形状は環状あるいは炭手状を呈していた可能性が高く、素環頭刀子の環等が想定できる。出土した3片は2～2.5cmの長さに揃い、各破断面は錆が及ぶことから、元の鉄製品から意図的に分割された鉄片の可能性もある。



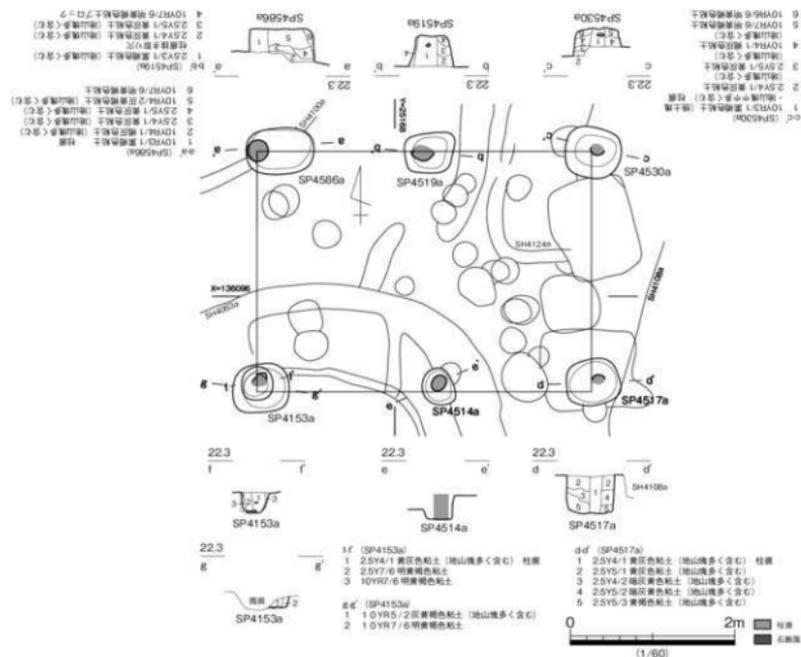
第242図 掘立柱建物 SB4566a 出土遺物実測図2

以上の出土遺物は、土器の様相は口縁部が拡張しない 1851 の甕や 1854 の高杯が後期前半段階に属すことから、その時期に廃絶した掘立柱建物と判断した。

(32) SB4613a

4 区南中央部で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間 1 間 (2.8m)、桁行 2 間 (4.1 m) の構造で、建物主軸はほぼ正方位。桁行柱間は 2.0 ~ 2.1 m、柱痕から推定できる柱の太さは直径 13 ~ 20 cm と細い。柱穴の規模はやや小形の隅丸長方形である。後期前半の竪穴建物 SH4100a や終末期の竪穴建物 SH4063 に切られる。

出土遺物は小片のみで図示していない。後期前半を下限とする掘立柱建物である。

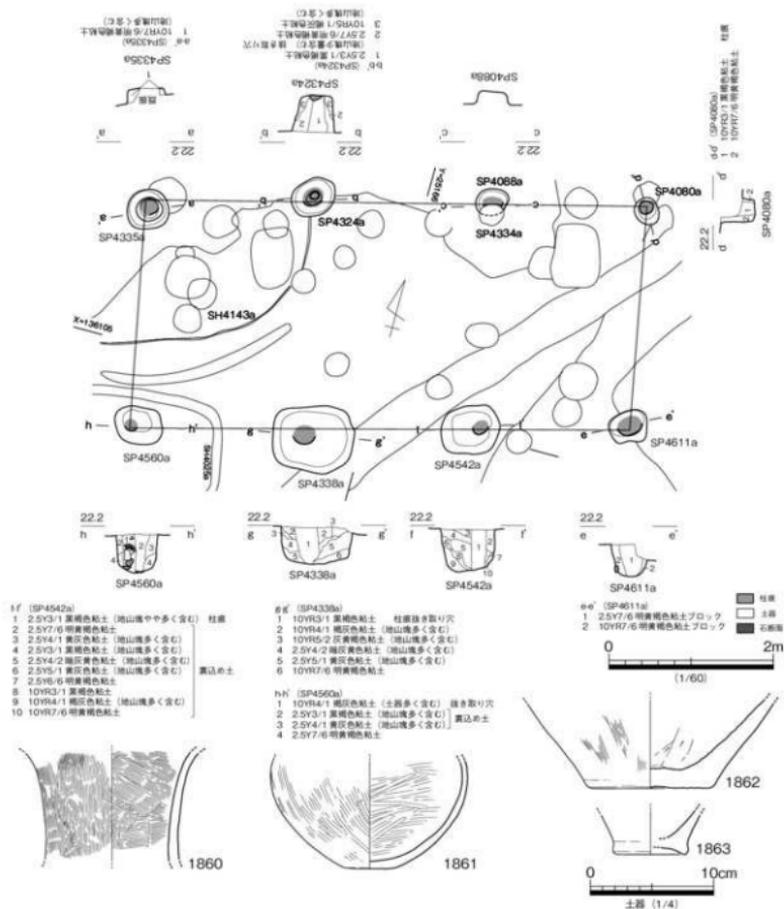


第 243 図 掘立柱建物 SB4613a 平・断面図

## (33) SB4614a

4区中央北側で検出した掘立柱建物である。梁間1間(2.8m)、桁行3間(6.1m)の構造で、主軸は北から75度東に偏る。桁行柱間は1.8~2.1m、柱痕から推定できる柱の太さは直径15~20cmと細い。柱穴の規模はやや小形の隅丸長方形である。後期前半古段階の竪穴建物SH4143aや前半新段階のSH4025aと重複し、SH4025a床面検出状況写真では床面に点在する炭化物等の出土遺物がSP4560a検出箇所で見られる状況が確認できることから、本建物が後出するものと考えられる。

出土遺物のうち1860・1861は長頸壺で後期前半新段階、1862も厚い平底の底部形状から後期前半に位置づけられる。1863は上げ底の甕底部片である。



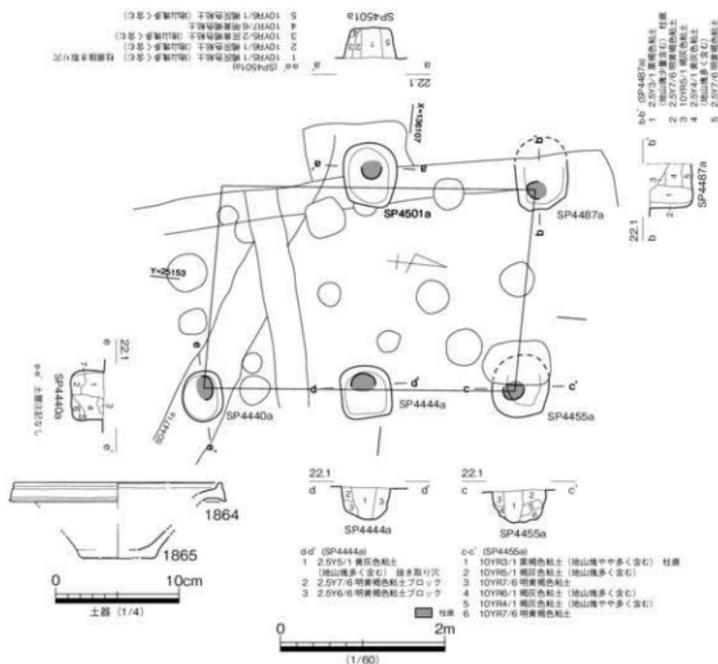
第244図 掘立柱建物SB4614a平・断面図 出土遺物実測図

出土遺物の下限は後期前半新段階にあることから SH4025a 埋没後、後期前半新段階において構築から廃絶が行われたと判断した。

### (34) SB4615a

4区西端で検出した南北棟の掘立柱建物である。中期後半新段階の溝SD4471aを切る。梁間1間(2.5m)、桁行2間(3.8m)の小規模な建物で、主軸は北から5度西に偏る。桁行柱間は1.8~2.0m、柱痕から推定した柱の太さは直径17~20cmと細い。柱穴の規模はやや小形の隅丸長方形である。

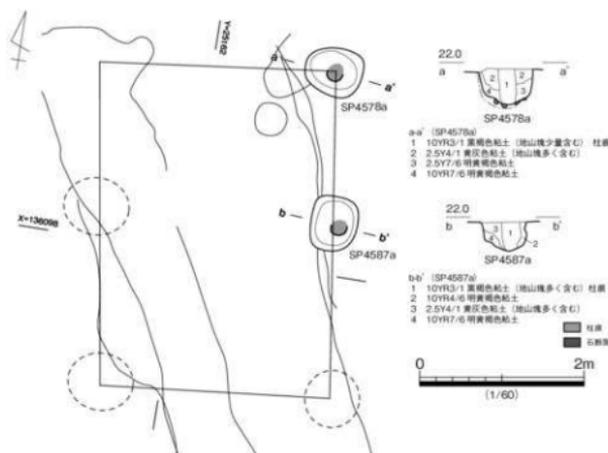
出土遺物は小片が多い。1864は広口壺口縁で凹線文を施文する中期後半新段階から後期前半古段階、1865は底部片で底縁稜線がやや緩く後期前半に属す。このことから、中期後半新段階以後に構築され、後期前半に廃絶した掘立柱建物と判断した。



第 245 図 掘立柱建物 SB4615a 平・断面図 出土遺物実測図

## (35) SB4616a

4区中央やや西寄りで検出した掘立柱建物である。大部分が中世条里溝SD4002aに切られて滅失するが、後期前半の竪穴建物SH4100aの下位で検出した掘立柱建物柱穴2基をもとに復元した建物である。そのような事情から全体規模は明らかでないが、位置的に北側に延伸する余地はなく、南はSD4002aの範囲内で収まる大きさとして考えれば、梁間1間、桁行2間又は3間の構造と推定できる。復元した建物主軸は北から5度西に偏ることとなる。柱痕から推定できる柱の太さは直径20cmである。図化できる土器が出土せず時期は後期前半含めてそれ以前と判断した。



第 246 図 掘立柱建物 SB4616a 平・断面図